

私の作った野菜は、どこの誰が食べているのか 北海道における生産者と食べる人の交流の現場から

井上淳生（北海道地域農業研究所）

1. はじめに

本発表の目的は、北海道における農業生産者と「食べる人」との交流を事例に、生産者にとっての「食」について考察することである。本発表の出発点は、ある生産者の一言にある。それは、「お客様に直接売るのは緊張する。」というものである。これは北海道で40年近く農業に携わるベテラン農家の声である。彼は何に対して緊張しているのか。この言葉の背景には何があるのか。そして、「緊張する」という言葉は、北海道農業という文脈においてどのような意味を持つのか。本発表では、札幌市近郊で実施されている事例に対する以上の問い合わせを通して、生産者による「食」への意味づけについて考察する。

2. 「北海道農業」というフィールド

日本の農業において北海道は特異な位置付けにある。その最たる例が、農業政策と一体となって進められてきた農産物の主産地形成と、それを担う大規模経営である。とりわけ、1961年の農業基本法以降、北海道は「基本法農政の優等生」として、政策的課題の克服に向けた先導的な役割を果たしてきた。稲作・畑作・施設園芸・畜産・酪農といった経営種別を問わず、農産物生産の選択的拡大と自立経営農家の確立が推進されてきたのである。現在も、農業をこれまで以上の「成長産業」とすべく、AI（人工知能）やICT（情報通信技術）を駆使した生産・流通の刷新が進められており、北海道は日本における「食料生産基地」としての性格をいっそう強めている。

このように、大規模経営、大規模広域流通が北海道農業の「主流」となるなか、生産と消費（食）の分離が進行する。生産の多くは、個別具体的な「顔の見える」相手というよりも、「消費者」（あるいは市場）という抽象化された諸個人に向けたものが支配的になる。「食べる人」も、農産物の生産の場から遠くなり、農産物に添付された産地表示や生産者名といったわずかな情報を通じて、生産現場の様子を垣間見るのである。

3. 「作る人」と「食べる人」の交流

一方、この状況に問題意識を持つ人々により、生産と消費の間を埋めるいくつもの取組が行われてきた。たとえば、食べる人達が生産現場に出向き、自らの身体で農産物が作られる過程を追体験する例や、生産者が直接販売の形で都市部に出向き、農産物の最終到達地点である消費者の「食」に生産者が直接関わる取組である。

キーワード 農業、北海道、小農、生産者、食べる人

北海道では生産者が主催する交流の取組が、1980年代頃に開始されている。有機農業という、当時では「異端」とされていた農業を行う生産者が集まり、自らの農業を知つてもらうために、都市部に農産物を持ち込んだのが始まりである。以降、生産者（有機農家含む）による「食べる人」へのたらきかけは徐々に広がりを見せていく。生産者にとって「食べる人」との交流は、自分達の作ったものの最終到達点を確認する作業にもつながるものであり、「食」と直にふれ合う機会なのである。

4. 生産現場の大規模化と交流ニーズの齟齬

しかし、生産現場が大規模化し、少数の作物に特化する傾向は、「食べる人」にとって交流の満足度を減じる方向に作用する。なぜなら、大規模化によって農作業の工程は単純化、一括化されることになり、交流のために必要な、作業上の細かな「ひだ」が入る余地がないからである。これに対して本発表では、交流のために経営の一部を大規模化とは異なる方向に向けた例を示す。

5. 交流を契機とした小農化

本発表では、こうした生産者側の変化を理解する上で「小農」概念に注目したい。近年、社会科学の分野で産業としての農業とは一線を画す「小農」が注目されつつある。「小農」は、人類学において、国家や市場に依存しつつも部分的には自立的な小規模生産者ことを指す。日本では農業経済学をはじめとした社会科学において伝統的に議論されてきたテーマでもある（玉 1995）。近年の小農「再評価」の火付け役となった農村社会学者、プログによれば、「小農的農業（Peasant farming）」は、「企業的農業（Entrepreneurial farming）」、「資本的農業（Capitalist farming）」にならぶ現代の農業類型である（Ploeg 2008）。彼は、小農は近代化によって消滅する弱い存在ではなく、グローバル化に適応し、積極的に自身の存立根拠を獲得する強靭な存在であると説いている。本発表では、人類学における「小農」概念を踏まえつつ、近年の社会科学における議論を参照し、生産現場に軸足を置いて事例を検討する。

〔参考文献〕

Ploeg, Jan, Douwe Van Der, 2008, 'The New Peasantries: Struggles for Autonomy and Sustainability in an Era of Empire and Globalization', Earthscan.

玉真之介, 1995, 『日本小農論の系譜』農文協

*本研究は2018年度サントリー文化財団助成研究「文化と身体の交差点としての食：文化固有性・産業化・異業種ネットワーク」（代表：風戸真理）の一部である。